

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ブラッドイ バトラー

ミナセルシエと淫靡な牙

小説 斐芝嘉和

挿絵 ヤツシマテツヤ

第一章	狩人と執事	006
第二章	擬態	027
第三章	侵襲	060
第四章	古の吸血鬼	083
第五章	搦め手	114
第六章	ルシエとミナ	135
第七章	淫靡な牙	173
エピソード		242

登場人物紹介

Characters



ミナ・シュレンベルク

ルシエ・ヴァン・ドラクルに使えている執事。温厚で怜悧な人柄。かつての吸血鬼との戦いで左腕を失ったため、義手にしている。

ルシエ・ヴァン・ドラクル

バンパイアハンターの末裔。没落貴族。ドラクルの名にかけてミナとともに吸血鬼を追っている。

男の声とともに明かりが点り、地下室の中が騒がしくなった。

ハッと顔を向けると、吸血鬼らしき子供を腰に絡みつかせた男たちが、ただひとつしかない扉からゾロゾロ入り込んでくる。

一、二、三……男は全部で六人。子供は十人くらい。若い吸血鬼たちは水色のスモックを着ているだけだが、男たちの纏っているスーツはいずれも高価そうだ。靴はピカピカに磨き抜かれ、大きな宝石をつけた指輪をこれ見よがしに嵌めている男もいる。

「……孤児院の出資者、ですね」

淫悦に蕩けかけていた頬を引き締め、碧と金の瞳を尖らせるミナ。

吸血鬼の巣だと知らずに金を出しているのならともかく、あるいは精神支配を受けて金を搾り取られているのならともかく——この男たちは、ラナフェルド師や子供たちが吸血鬼だと知っているながら協力しているようだ。

「そんな怖い顔をするな。せっかくの美人が台無しだぞ」

「さあ、我々のことは気にせずに、続きをしたまえ」

ニヤついた男たちは突っ立ったまま、それぞれの腰にしなだれかかっていた子供たちが慣れた手つきでベルトを緩め始めた。小さな手を挿し込んでペニスを引き出し、歯噛みしているミナに見せつけるようにピチャ、ペチヨ、と湿った音を立てて舐め始める。

瞳や肌の色を見れば分かるが、男たちは吸血鬼ではない。子供たちの餌だ。だが、その

顔に恐怖の色はない。むしろ愉しそうだ。

吸血鬼になれない者でも、嘔まれて血を吸われるのは気持ちよいモノらしい。死なない程度に吸われると、麻薬のように病みつきになるのだという。

だが、ミナに言わせればそれも精神支配の一種だ。餌に逃げられないよう、快楽で誑かたぶらかしているだけのこと。

「アナタたちは騙されているのですよ。そのコたちは生きた麻薬などではありません。ヒトをヒトでないモノに変えてしまう、悪魔なのです！」

「その通り。赦されぬ快楽を与えてくれるのは悪魔くらいしかいないだろう」

ひとりの男が笑い、股間に貼りついていた少女の頭をぽん、と叩いた。紅い目を光らせた少女ははにかみながら背を向け、四つん這いになり——自らの手でスモックの裾を捲り、小さな尻を晒す。

「な……まさか、そんな……やめなさい！」

愕然としたミナの目の前で男が膝をついた。ぷりっとした少女の尻に片手を添え、もう片方の手で己の肉棒を握り——。

「ん、ふ……ああうっ！」

グリ、グリ、と肛門を貫かれ、喉を反らして震える少女。根元までしっかりねじ込んだ男は、呻いている少女の腰を両手で掴み、ゆっくり腰を振り始めた。

ぬぶぶ、ぐぼぼ、ぬぶぶ、ぐぼぼ——出入りする男根と捲れ返る尻孔が、卑猥な音を立てる。奥までねじ込まれるたび少女は喘ぎ、甘い声をこぼして小さく震えた。

一組だけではない。ほかの男たちもそれぞれに、幼気なパートナーを犯し、力強く腰を振って、裏返った声を上げさせる。

血を吸われて悦んでいるだけなら、勘違いしている哀れな犠牲者だが——こうなるとも、同情する余地はなかった。表向きには篤志家とくしかとして通っているだろうことを考えれば、男たちの犯している罪はさらに重い。

「こんなこと……赦されるとお思いですか!？」

男たちに向かって叫ぶミナの胸元で、

「なにを怒ってるの、お姉様あ？」

シャツの狭間から半分ほどはみ出した形よい乳房に頬擦りしていた少女が、尖った牙を見せて笑った。

「吸血鬼はすぐに傷が治るんだから、あんなに太いオチンチンでも全然平気ですよ？ このオジサンたちはお金持ちで、しかも子供が大好きなの。だから、お金も払ってくれるし血も吞ませてくれるわ。そのお礼として、私たちはエッチなことをするの。それに——ほら、あの口も気持ちよさそうでしょう？ シンケイケイが発達してるから、お尻の穴でも気持ちよくなっちゃうのね。オジサンたちも悦ぶ、私たちも気持ちいい。みんなが幸せに

なれるのだから、それでいいじゃない」

「よいわけ……ないでしょう！ みんな幸せだというのなら、行方不明の子供たちはどうなのですか!? 餌にされ、血を吸い尽くされて——そのどこが幸せなのですか!」

「あら、なにもかもお見通しなのね」

カッとなって言い返すミナから、少女が離れた。

気がつくと、地下室の中がやけに静かだ。繋がっていたはずの男と子供たちが離れ、ニヤニヤしながら、身動きできない女執事の周りに集まってくる。股間にそそり勃たつたままの男根が、おぞましく忌まわしい。

赤々と輝く肉冠、緩く反り返って裏筋を見せる太い肉棒——その全体がぬめり光っているのは、子供たちの体液か。

射精寸前で引き抜かれたのか、妖しい粘液に照り光る男根は青い静脈の網目を浮かべ、ヒクン、ヒクン、と蠢うごいていた。紅くむくれた尖端、縦に割れた小さな鈴口には、透明な滴が大きな珠となって膨らんでいる。

「よく考えて、お姉様。私たちが血を吸ったらみんな気持ちよくなるのよ。死んだコたちも幸せだったに決まってるじゃない」

「死ぬ前にはちゃんと、我々が『大人』にしてやっているしな」

「あ……アナタたちは、悪魔どころか畜生以下です！ 恥を知りなさい、恥を！」

身体を揺すり、眉を逆立てて叫んだのに、降ってきたのは嘲笑だった。

「勇ましいお嬢さんだ。しかも、美しい」

「この凜々しき、穢したいな」

「……ッ！ なにを、する気、ですか!？」

身を強張らせたミナの左右に、男たちが立った。その隣に膝をついて無防備な脇腹へ手を伸ばしてくる者、立てた膝へ腰を近づけてくる者もいる。

「お嬢さんに女の悦びを思い出していただきたいのは山々なのだが、ラナフェルド師のペットでは恐れ多くて手が出せぬ。だから、せめてもの気持ちだ。受け取ってくれ」

「く……ううっ！」

右から突きつけられた亀頭に、頬を揉まれた。慌てて顔を背けてると、待ち構えていた別のペニス、唇に擦りつけられる。

「ふむ。心地よい肌だ。子供たちほど柔らかくはないが、瑞々しくて張りがあり——おお、おくれ毛も気持ちいいぞ」

男の笑い声が聞こえ、生臭い肉の塊が頬から耳へ、うなじへと滑る。ショートカットの襟足を掬うように黒髪の下へ潜り込み、柔らかなおくれ毛に先走り汁を擦り込まれた。右頬に触れていたペニスは一度仰向いて額へ向かい、嫌悪に歪んだ眉を撫で降ろし、ギュッと閉じた瞼に押しつけられる。

「服も、さりげなく金がかかっているな。使用人の分際で、なんとも贅沢なことだ」

膝に乗せられたペニスが、緊張した太腿を辿って腰へ近づいてきた。布地越しに感じられる淫らな熱さ、汚らわしい重み——その尖端がストラックスの股間に触れるより早く、細いウエストをまさぐっていた男の手にシャツの裾が引つ張り出された。ミナの体温が染みついた薄布で赤黒く照り光る淫茎を包んだ男は、脇腹の柔肌に筒先を擦りつけながら肉棒全体をシュッシュッとしごき始める。

(な……なんてことをッ！)

纏っている服は、いずれもルシエが見繕い、仕立ててくれた特注品だ。執事がみつともない恰好をしていたら私が恥を搔くのよ——誇らしげに胸を張っていたお嬢様を思い出すと、半ばこぼれ出た乳房を弄られたときより遙かに強い怒りを憶えた。

「や、め……なさいっ！ 離れなさいッ！」

肩や肘が痛むのも構わず、鎖に吊り上げられた腕を懸命に振るミナ。

だが、虚しい抵抗は男たちを悦ばせただけだった。

「いい声だ。やはり囚われの美女は、そういう声で鳴くモノだよ」

「しかし言葉遣いになっていないな。ただの執事が我々に命令するののか？ 礼儀知らずにもほどがある。どんな主人に飼われていたのだから」

「わ……私のことはともかく、主人への愚弄は聞き捨てなりません！」

叫ぶ口元に、真つ赤な亀頭が擦りつけられた。うなじに戯れていた硬い肉塊は、シャツの襟を押し退けて背中へ——なだらかな肩の柔肌に、おぞましい熱棒を感じる。

「聞き捨てならなければ、どうするとうののだ？ んん？ どうもできないだろう」

横から抱きついてきた男のペニスが、スラックスのポケットにねじ込まれた。柔らかな布袋越しに感じる、ゴツゴツとして鋼のように硬い強張り。

ソレだけではない。

頬や唇に擦りつけられている肉棒が、うなじから襟へ挿し込まれた剛直が——燃えるように熱く、弾けんばかりに張り詰めていた。身動きできない身体に群がった男たちの腰が円を描く速度を次第に速め、地下室に響く鼻息が不穏なほどに荒くなる。

強張ったペニスを擦りつけるたび、ミナの纏っていた美青年のような凜々しさが削り取られた。その下から現れるのは、抗うことの赦されない、美しき女囚の悲哀。

ミナが男根の感触に呻くたび、男たちの征服感が満たされていく。必死になってもがいても、逃れられない哀しさが強調され、下劣な男たちを悦ばせてしまう。

「くう、うう……ッ！」

呻くミナの頬で——ミチ、ミチチ！

生臭い淫棒が、肉の軋みが聞こえてきそうなほど熱く大きく強張った。

シャツの裾でしごいている男の手が怖いくらいに加速する。

うなじから襟へ挿し込まれた男根が細かく激しく上下して、スラックスのポケットを犯した肉棒が柔らかな薄布越しにミナの太腿をグリグリと揉み込んでくる。

(く、来る……もうすぐ、アレが……！)

おぞましい予感にギユツと瞼を閉じた、その瞬間――。

ビュクッ！ ビュククッ！ ドピュピュッ！

嫌悪に蒼褪めた顔に向け、白く濁った粘液が勢いよく迸った。

ベチャベチャと額に粘つき、前髪を生臭く濡らす。金色の瞳を守るモノクルに垂れ、右の瞼を塞いで頬から耳へ――。

スラックスのポケットにも、ドプ、ドプドプ。

黒シャツの襟から背中に向けて、ビュルル、ビュル、ビュル。

太腿にも脇腹にも、ショートカットの黒髪にも燕尾服の肩にも――凄烈に香る大量の臭液が、容赦なく浴びせかけられた。あまりの青臭さに噎せそうになる。

唇に塗り広げられた精液が細い顎へ流れ落ち、氷柱のように長く長く垂れた。

髪を濡らした白濁液は頭皮にねっとり粘ついて、毛穴から染み込んでくるような――。

黒で統一された着衣に点々と飛び散った青白い粘液は、すぐに布目を染み抜けてきた。柔肌にぬめり、身体中におぞましい生温かさを感じる。

(ううう……穢らわ、しい……！)

——はずなのに。

どうしてなのか、胸がドキドキ高鳴り始めた。

精液に塞がれた鼻から漏れる息は怒りとは別の熱を帯び、白濁液を擦り込まれた柔肌が内側から輝くように瑞々しさを増していく。

そんなバカな、そんなはずはない——自分の身体が示した淫らな反応に戸惑っていると、
「あは。見て見て、オジサマあ！ お姉様ったらヨクジョーしてるわ！」

笑った吸血少女に、シャツをパッと捲られた。

「やめなさ……あっ!？」

ハッと見下ろしたミナの頬が、羞恥に火照る。

薄い桜色に輝く美乳の先、乳首が赤々と色づいていたのだ。

きつとなにかの間違いだ、こんなことあるはずがない——いくら否定しても、身体は確かに欲情していた。男たちの視線を浴びただけでも、はしたなく勃起した肉豆がこらえ難いほど疼く。愛撫を欲する胸先に共鳴したように、太腿のつけ根、スラックスと下着に守られた牝の割れ目までウズウズそわそわしてしまう。

「吸血鬼化が進んで、ホンノーがコーシンしてきたのよ！ それとも、精液の匂いを嗅いだからかしら？ 熱くて硬くてたくましいオチンチンを、顔や身体に擦りつけられたから？」



「具合はどう？」

「ふが……」

前に回ってきた少女に、ミナは戸惑った目を向けた。穴だらけの紅いボールは思ったよりも大きく、顎が限界近くまで開かれている。これでは、歯を喰い縛るところではない。舌が抑えられているせいで咽喉を塞ぐこともできず、鼻ではなく口で息をしてしまう。

「ふおお、うえすふあ……ふああういふあふえないふおおえうあわふふえ……」

そうですか、菌噛みさせないことではなくて——神父がなにを考えていたのかようやく理解し、ミナは怒りを通り越して呆れた。精悍な女執事が口を大きく開けて涎を垂らす、間拔けな表情を見たかったのだろう。

（そんなモノがお望みならば、いくらでも見せてあげましょう）

笑われることは悔しいが、ミナが恐れているのはただひとつ、浅ましい吸血鬼に墮ちてお嬢様を守れなくなることだけ。その可能性を少しでも遅らせることができるのなら、どんな恥辱だろうと耐えられる。

「残念だわ、鏡に映すことができなくて。いま、とってもオママヌケな顔になっていらつしやるのよ、お姉様……あら？　あまり効いていないようね」

神父の意を受けてミナを嘲笑した少女は、女執事の顔に冷笑が浮かんでいることに気づいて鼻白んだ。

やはり、そうだったのですね——いやらしい意図にささやかなりとも抵抗できたことで、ミナの心に余裕が生まれる。

神父は、ドラクルの血筋にちよつかいをかけるつもりはないと言っていたが、しばらくの間は信じてよいかもしれない。すぐに屈服させられる子供たちに飽きたという言葉も、おそらく本当の心情だろう。

つまり、ミナが耐えれば耐えるほど、ルシエの身に危険が及ぶ可能性は遠退くわけだ。そして時間を稼ぐことができれば、神父を倒すチャンスが巡ってくるかもしれない——。

(……精神支配は、まだ受けていないようですね)

神父に対する敵意を意識しても、頭に靄はかからなかった。

ならば、まだ戦える。

自分がまだ由緒正しき〈狩人〉の下僕であることを確認したミナは、膝立ちのまま目の前の壁まで進んだ。冷たい石の壁に肩を預け、頬を押し当てて、大きく吐息を漏らす。

闘志はまだ燃えているが、それ以上に——秘裂の疼きは強烈だった。

(私は、戦える……ドラクル家の執事なので、当然、です……)

言い聞かせているのに、いやらしい粘膜器官がムズムズする。

太腿のつけ根が熱い。ユラユラ躍る火の穂に炙られているようだ。膝を内側に向けて腿を締めると熱を帯びた肉畝が押し潰され、愛液を滲ませたピラピラが擦れ合い甘やかな感

覚が湧き上がる。ボールギャグを嘔まされた口からは荒い吐息が溢れ出し、スラックスに包まれた美尻が揺れそうになった。

意識としては戦えるつもりでも、身体がこんな状態ではとても無理だ。

実際、膝に力が入らない。無理に立ち上がろうと下腹に力を込めれば、もどかしい疼きがさらに膨れあがる予感もある。

この淫らな欲望を、どうしたら鎮められるだろう——石の壁に身体を預け、紅いボールを嘔まされた口から熱い吐息を漏らして考えていると。

「どうしたの、お姉様？ 恥ずかしいお顔を見られたくないの？」

無邪気な笑顔を取り戻した少女が、背後に近づいてきた。ミナの様子がおかしいから、自分の——いや、神父の意図通りになっているのだと勘違いしたのか。

（生憎ですが、そうではないのですよ）

肩越しに少女を見つめ、冷笑を返そうとした——そのとき。

パァンッ！

うしろへやや突き出す恰好になっていた美尻を、小さな手に打たれた。

「ッ!？」

吸血鬼化しているとはいえ子供の力だからそれほど痛くはないが、おしおきされる幼女のような自分の姿を客観視すると羞恥に頬が赤らんだ。女執事の尻を打った少女が得意げ

な顔をしていることも、ミナの自尊心を深く抉る。

「——いえ、これでいいのです。この程度のことであの神父が満足してくれるのなら……それだけ、お嬢様が危険に晒される可能性が遠退くのですから」

自己犠牲の意味を再確認し、揺らぐ心を鎮めようとするミナ。

だがその無防備な尻を、

「こっち向きなさいよ！ 向かないのなら、真っ赤になるまで叩き続けるわよ！」

調子に乗った少女がパンッ！ パンッ！ と繰り返して叩く。

白い掌が当たると、スラックスの黒い布地に浮き上がった桃尻の丸みがプルン、プルン、と波打った。ムッチリとした曲面は女らしいが、たゆまぬ鍛錬によって形よく引き締められた、女性にしては贅肉の薄い美尻だ。その肉に波紋がよぎるといふことは、かなり強く叩かれている証——痛くないのは少女の力が弱いからではなく、吸血鬼化したミナの耐久力が増していたから、だろう。

その証拠に、

「く……ふ……う……！」

パァン、パァン、と地下室に小気味よい音が響くたび、石組みの壁に預けた細い身体が揺れる。痛みは弱くても衝撃が弱いわけではないから、身体全体が揺れてしまうのだ。ゴツゴツした壁に頬が擦れる。はだけられた胸では桜色に輝く乳房が弾み、敏感な乳首が冷

たい空気にしごかれる。

痛く感じられない打擲だけならいくらでも耐えられるが――。

(う……くっ!? ああ、どうして、そんな……!?)

何度も何度も打たれた尻が、じんわりと熱を帯び始めた。蓄積する微かな痛みが、少しずつ快感にすり替わっているらしい。

ストラックスに包まれた尻房が火照るのと歩調を合わせ、秘部の疼きも増し始めた。打たれた柔肉が振動すると、ショーツの股布がキュンキュンと引つ張られ、肉畝がさりげなく揉み込まれるのだ。

さらに――。

「う、ん、く……んうっ!?!」

淫悦の甘やかさとは明らかに違う、鈍痛に似た小さな疼きまで生じてきた。ある意味ではよがることよりもっと恥ずかしい――尿意。

発生学的反射作用という単語が脳裏をよぎる。口と膀胱は発生学的に神経系が連動しているため、口を開けると膀胱も緩むのだそうだ。ということ――慌てて顎に力を込めたが、舌を押し潰し上顎を押し上げているボールのせいで閉じることはできない。微かに感じられていた尿意は尻を一打ちされるたび、少しずつ、だが確実に大きくなり、やがてハッキリとした苦痛になった。

そのうちに、柔らかな下着に揉み込まれる淡い快感より、膀胱から溢れ出そうになっている熱い液体のほうが強く感じられるようになった。膝立ちになった脚を内側に搾り、股間に力を込めて懸命にこらえてはいるものの、一度高まり始めた尿意は完全に放出してしまふまで治まることはない。

(だ、ダメ……出る、出てしまい、ます……！)

こんなところで、こんな恰好で——恥ずかしさに頭が煮え、息が上がる。

開きっぱなしの口には涎が溢れ、乱れた吐息とともにトロトロとこぼれ始めた。

「あ、あつふえ……ふおいれに、いふあふえふえ……！」

待って、トイレに行かせて——プライドを曲げ、いやらしい吸血鬼にお願いするという屈辱に耐えて尿意を訴えたのに、

「なに？　ちゃんとやってくれなきゃ分からないわよ」

ミナの背後に立った少女は明るく笑っただけだった。

本当は、なにを言っているのか分かってはいるのかもしれない。わざととぼけて、ミナが尿意に苛まれている様子を愉しんでいるのかもしれない。

「手が痛くなっちゃった。綺麗なお姉様には申しわけないけど、コレを使うわね」

言い訳がましく取り出したのは、乗馬用の鞭。背中に隠していたのだろう。ヒュッと風を切って振り上げた少女は、ミナが頬を押し当てている壁をひとつ強したたかに打った。

ピシイッ!

響いた音は、鋭い。

反射的に身が竦み、膀胱が縮み上がって漏れそうになった。

(……ッ! こ、この程度の、こと、で……!)

口の中のボールギャグを噛み、痛みに身構えるミナ。

幸い、というべきか、小さな手で打たれ続けた尻は熱を帯びて痺れている。相当強く打たれても、たぶんあまり痛くないだろう——しかし。

——ヒュパシッ!

「ンああッ!」

突き刺さるような痛撃は太腿の狭間、スラックスと下着に守られた秘裂に弾けた。鞭先をミナの膝の間の床につけた少女が、鋭く振り上げたのだ。

衝撃の杭が疼く腔穴を貫き、子宮にまで響いた。

痛む股間に力が入り、膀胱が絞れて尿意が高まる。

「あはあ……き、気持ち、イイ……! 男のコでも女のコでも、ココを打つとヒイヒイ泣くよねえ……って、あらあ? 泣かないの、お姉様?」

必死に耐えているミナの顔を、不服そうに唇を尖らせた少女が覗き込んできた。

(な、泣くもの、ですか……!)

プラスチックのボールに牙を立てたミナは、モノクルの下の瞳を怒らせ、睨み返す。

だがその顔は湯あたりしたように赤らみ、うしろ手に縛られた身体は小刻みに震えていた。スラックス越しに強く打たれた秘裂が焼きつきそうなほど痛く、そしてそれ以上に——少しでも気を抜くと漏れてしまいそうだ。熱い小水が尿孔の傍まで押し寄せている。懸命に息を整え、耐えようとしても、呼吸するたびに膀胱が煮え、恥ずかしい限界が否応なく近づいてくる。

ふう、はあ、ふうう——ボールギャグを嘔んだ口から溢れ出す、艶めかしい吐息。溢れた涎は口端を垂れ、細い顎から氷柱つららのように垂れ下がっていた。

羞恥に全身が火照り、髪の毛の生え際や耳の裏に小さな汗の粒がフツフツと噴き出して、燕尾服とシャツに包まれた背が蒸れる。剥き出しの乳房も火照り、桜色の柔肌に感じる空気がますます冷たく心地よく——股間の衝撃に共鳴したのか、瑞々しく形よい双球の先端には乳首が紅く膨らみ始めていた。

「……泣かないけど、震えてはいるのね。あ！ ひよつとして、お漏らししそなの？」
笑みを戻した少女が視界から消え——。

「うっ!? あ、やえふえ……やえなふあいつ！」

スラックスの尻が、細くしなやかで硬いモノ——乗馬鞭に撫でられる。

「綺麗なお姉様がお漏らしするトコ、見てみたいなあ。もちろん、服を着たままのお漏ら

しよ。トイレでオシッコするのを見たつて、当たり前すぎて面白くないもの。小さな女の
コのお漏らしも、やっぱり当たり前だからつまらない。お姉様みたいにカッコイイ女のヒ
トが、お洋服の中にオシッコするのが一番面白いわ。ね？ だから出して」

いやらしい言葉とともに、鞭先が太腿の間へ滑り込んできた。硬い軸が布越しに割れ目
を捕らえ、鋸挽くように前後する。

「ふ、あ……ンラウッ！ や、え……ええっ！」

太腿を締めて止めようとしたが、細い鞭を抑えることはできない。繰り返される刺戟が
ストラックスを抜けてショーツを伝い、秘裂全体にじわじわ響く。

（うう、い、いけない……こんな……ッ！）

次第に高まる快感とすでに切迫した尿意に焦り、ミナは身体を振った。だが、
「あは、お姉様がお尻を振ってる！ 気持ちいいんだ、コレ。もつとしてあげるわね！」
いやらしい少女を余計に悦ばせただけだった。

股間に押し当てられた乗馬鞭がバイオリンの弓のように動き、快感の弦と化した粘膜花
弁が掻き鳴らされる。秘裂から肉芯に向けて染み渡る、淫らな旋律。甘やかな振動は尿道
にも響き、膀胱が共鳴して沸騰し始める。

「うう、く……ううッ！」

石壁に擦りつけた頬が、熱い。

ボールギャグを嚙んだ口から涎混じりの吐息が溢れ、内側を向いた膝がプルプル震える。噴き出す汗に背や腋が蒸れ、平手で打たれまくっていた尻がむず痒くなる。

しかしなんといつても恥辱の核は、

(こ、こんな、子に……こんなこと、されて……ああ、ク、うううッ！)

否応なく高まる尿意だった。

すでに限界を超えている。

沸騰した小水は出口の裏側まで迫り、いまにも噴き出してきそうな気配。真っ赤に灼け

た針でチクチクと、尿孔を内側から突きまくられているようだ。

いやらしい鞭から逃れれば、もう少し耐えられるかも——横様に倒れて太腿を閉じれば、

鞭は動かせなくなるはずだ。

そう思い、床についている膝をずらそうとした途端、

「ふあ……ッ!？」

割れ目からへソにかけての柔肌が、ゾクゾクッとした。辛うじて保たれていた均衡が崩れ、尿意がさらに膨らむ。

ダメだ、動けない——慌てて身を強張らせ、股間へ力を込め直したのに、

「くっ!? あ……うううっ!？」

一度崩れたバランスは、元には戻らなかった。

グツグツと煮え立った膀胱が、心臓のように拍動している。
押し出された小水が尿道に充滿し、小さな出口に殺到してくる。

「うはあ……お姉様、苦しそう。もう漏れそうなの？ 我慢できないの？」

震えるミナの背に擦り寄った少女が、甘い声で囁きながら鞭の動きを速めた。

（あ、あ、あああつ！ だ、ダメ！ そんなことしたら……ああ、ああ、あああつ！）
秘裂を襲う小刻みな振動が呼び水となり、尿孔が開いていく。

「い……いあ……え、やらあああつ！」

真つ赤に染まった顔を仰向け、ふあ、ふあ、と息を吐いて尿意を逃がそうとしても、ダメだ。そんなことではもう、とてもではないが追いつかない。

「やえふえ、やえふえ……や、や、ああッ！ 出ちやう、出ちやう、出ちや……あつ!!
あふいッ!! ああ、あああ、あうああ、あああああ——ッ！」

——ビュッ！ ビュルルッ！ ジョワワッ！

懸命に我慢し続けていた小水が、秘部にびったり貼りついたショーツの内側へ勢いよく迸った。

（ああ、ああ、ああつ！ 出てる、出てる、出てるううう……ッ！）

恥ずかしい熱水が股布から溢れ、ストラックスの太腿を駆け下りていく。

咄嗟に唇を噛み、股間に力を込めても、



膣と子宮を隔てた肉膜に熱い牡肉が触れるたび、鮮烈な感覚が背を貫いた。そこはポルチオ性感帯——ただでさえ快楽神経の集中した性感帯が、ラナフェルド師の妖しいペニスに噛みつかれ、さらに感度を高められてしまった肉悦の極点。

「ああ、ふああ……あああああッ！」

膣と直腸を埋め尽くした硬く太いモノがグリッグリッと動くたび、蜜まみれの膣壁が磨り潰され、快感の火花が弾けた。ひとつひとつは小さいが、息つく間もなく次々と炸裂し、そのたびに眩い稲光が脳天を突き抜けていく。

（お、おかしく、なるうう……おかしくなつて、しまうう……ッ！）

二本の男根に突かれるまま、絶頂へのスロープを為す術もなく駆け上っていると――。

グ、ちゅ——グちちチッ！

「ふあ!? お、おふおお、ふあま……ッ!?」

ミナのペニスを呑み込んだルシエの膣が急に圧力を強め、肥大化クリトリスが熱くぬめる膣膜に力強く揉み込まれた。薄い粘膜隔壁越しに裏筋を揉み込んでくる、たくましい弾力——お嬢様の尻穴にも、鋼のように硬い男根がねじ込まれてきたのだ。

「くう……あああああッ！ あ、熱い……のが、二本、もおおっ！」

ニヤついた男に背を抱かれたルシエが、甘え声で鳴きながら起き上がった。背を押され、無理矢理起こされたのだが、その細腕は縋るモノを求め、ミナの身体に触れると母親を

見つけた幼女のようにヒッシとしがみついてくる。

(ああ、お嬢様——ッ！)

擦れ合う頬に、電気が走った。子供たちに揉みまくられて巨大なクリトリスのように敏感になつていた乳房も、ルシエの薄い胸に押し潰され、鮮烈な快感が爆発する。

ぐぶちゅっ！　ぐぶちゅっ！　ぐぶちゅっ！

悦びに打たれ、加速する腰。直腸側から圧されて狭くなった粘膜穴を猛る逸物で掻き回す。肉膜のすぐ裏側にある男根が応え、ミナとは違うリズムでグリッ！　グリッ！

「えむおお……ッ！　お、おふい、ンふい……んううっ！」

しゃぶられているような悦びに、手淫に似た心地よい圧力が加わった。

肉芯に渦巻く熱いモノが一気に煮え滾り、いまにも爆発しそうなくらい膨れあがる。

「はう、ふあ……ンぷっ!?　ん……ふえもっ！」

涎混じりの吐息をこぼす口も、横合いからねじ込まれた男根に挟られる。亀頭を擦りつけられた頬の内側が甘く痺れ、熱い重さに押し潰された舌が蕩けていく。

(これ……美味しい……オチンチン、美味しいッ！)

口腔に染み渡る牡エキス、脳髓に浸透する淡い精臭——肉の悦びに酔った牝の粘膜は、どこもかしこも性感帯だ。淫悦に操られた唇が赤黒い淫茎に絡みつき、

「ンうう、ふあ……ンぷあ……んん、チュッ！」

音が立つほど強くしゃぶって、男のたくましさにくうとりする。

夢中でペニスを吸い立てているミナの傍ら、狭い双穴を犯されて甘やかな鳴き声を漏らしているルシエの幼気な頬にも——グリ、グニツ!

燃えるように紅い肉冠がふたつみつ、容赦なく擦りつけられた。よがり悶える二匹の牝に昂奮した男たちが、順番を待ちきれなくなったらしい。ルシエがギュッと握り締めた小さな手に、鋼のように強張った亀頭をねじ込もうとする者もいる。艶やかな金色の髪で、赤黒く照り光る淫茎をしごく者もいる。

「にやふう、ああ、あううっ! ミナ、ミナ……ミナああっ!」

柔らかな臉や小さな鼻に先走り汁を塗り込まれたお嬢様が、感極まった声を張り上げて鋭く振り返った。口に男根をねじ込まれたミナが精臭に酔ってしまったように、男根を頬に感じたルシエも悦びの階段を駆け上っているのだろう。

「い、イッちやう……イッちやうよお、イッちやうよおっ!」

叫んだルシエがミナの首筋にしがみつき、自ら腰を振り始めた。

ぬぼちゅっ! ぐぼちゅっ!

出入りする肉茎に、紅い粘膜を捲り返される幼気な花芯。淫棒が抜き差しされるたびぶじゅじゅ、ぶじゅじゅ、と細かく泡立った愛液が噴き出してくる。

「イ……イッて、くらしやい……おふおおふあま、おふおおふあまああっ!」

お嬢様に応えた女執事が白い喉を反らし、ペニスを頬張ったままの口で甘い鳴き声を上げた。熱く潤んだ膣膜に快楽神経の塊がジュチュユツとしゃぶられ、ルシエが動くたび凄まじい電流が脳天を突き抜けていく。

ミチチ……ムククッ！ メキキッ！

口、尻穴、膣、手の中で、男たちが急速に強張った。頬やうなじに感じている牡肉も熱さと硬さを増し、汗ばんだ柔肌を揉み込みながらさらにいつそうたくましくなる。

（あ!? ああッ！ 来る、来る来る……アレが……来るうっ！）

なにもかも吹き飛んでしまうあの瞬間が、もうすぐ来る——昂るミナより一足早く、「いくうう、いくいくううっ！ ミナのおチンチンれ、いつぱいのオチンチンれ……と、飛ぶうっ!? 飛ぶ飛ぶ、飛んじゃ、飛んじゃ……ふああ、ふえあ、ああああッ！」腕の中のお嬢様が、涙と涎を撒き散らして果てた。

「ひあッ!? ひ、ひい！ おじよう、しゃつまあ——ッ！」

じゅううつちゅうつちゅうううう——ッ！

痙攣しながら緊縮する膣洞に、肥大化淫核が強くしゃぶられる。

肉棒の芯に溜まった熱いモノが、鈴口目指してグググッと迫り上がり——。

「れ、れ、れちゃううっ！ あちゅいのが、あちゅいのが……ああ、ああ、あああッ！
れるれるいくいく、イイひいっ！ クうう——ッ！」

——ビュクッ！

びゅるっ！　びゅるるっ！　ビュククッ！　ドピュッ！　ドピュパッ！

限界まで強張ったミナの疑似ペニスを震わせて、熱い溶岩が勢いよく迸った。

「にゃひい——ッ！」

駆け抜ける閃光、バネ仕掛けのように反り返る背筋。

羞恥も理性も、手足の感覚すらも——絶頂の突風に煽られ、一瞬で吹き飛んでしまう。

そしてその、跳ね上がって蕩けたミナの顔に——。

ビュクッ！　ドピュッ！　ビュルルッ！

青臭い水糊のような粘液が、勢いよく浴びせかけられた。周りの男たちの精液だ。

「あふあ……ふあっ!?　うう……ン！　うふ……ッ！」

喘ぐミナの膣や尻穴、口に——ドピュッ！　ビュクッ！　ビュパッ！

仰け反った顔にも、汗ばんだ黒髪にも、燕尾服に包まれた肩や子供たちに揉みまくられ

て桜色に火照った乳房にも——太い男根を呑み込んだ双穴の奥にも、涎を垂らす口の中

も、蕩けるほど熱い牡の粘液がビュク、ビュク、ビュク——。

(イイ、イイ……イイッ！　おちんちん、ビュクビュク……イイイッ！)

出すのもかけられるのも、同じくらい、イイ——ベチャベチャと降り注いだ白濁液が、

前髪を濡らして額に粘つく。モノクルに落ちた滴は熱く生臭い氷柱となつて頬に垂れる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>